



# みちくさ

放浪篇 No.3

平成 29 年 7 月 21 日

## ヤング・ミュージック・ショー

このタイトルを載せると、還暦の私は心ときめく感じがしますが、若い人にはきっと、何かとってもダサイ名前と写るでしょうね。これは、昔 NHK でやっていた海外のミュージシャンを取り上げた番組です。あるときはドキュメンタリータッチだったり、コンサートの模様をそのまま放映したりと、とにかく映像に飢えていたあの当時、テレビで大物タレントが演奏をしている姿を見るだけで、それはもう感激ものでした。(秋田は当時、民放 2, NHK 2 しかなかった)

はじめてビートルズの動く映像を見たのは、東芝のコマーシャルで、ほんの数秒のカットでした。それでも、中 2 の時、動いているビートルズを見たときの感激は忘れられません。ヤングミュージックショーは、私は高校生から大学生の頃、つまり、70 年代の初め頃にやっていたものと記憶しています。

この番組の第 1 回目は CCR (クリーデンス・クリアウォーター・リバイバル) でした。コンサート場面と言うよりは、納屋みたいなところで演奏の練習をしているような映像だったと記憶しています。ジョン・フォガティのあのしゃがれた声が素敵でしたね。もっとも今思うと、かなりアメリカの片田舎から出てきたようなバンドでした。それからあと、記憶にあるのが、ストーンズのハイドパークでやったフリーコンサートでしょうね。ブライアン・ジョーンズが急死し、その 5 日後くらいにやった追悼コンサートだったと思います。新しくミック・テイラーというブルースバンドのギタリストが追加で加入したコンサートの映像でした。ミック・ジャガーがピエロのような格好でステージに登場したのが印象的でした。

それから強烈に印象に残っているのは、ロッド・スチュアートとフェイセズでしょうね。ロッドが長いマフラーを首に巻いて、マイクスタンドを斜めに構えて歌うあの姿はとても格好良かったです。今思うと、フェイセズのギタリストは、今ストーンズにいるロン・ウッドでした。

また、映像として忘れられないのが、エマーソン・レイク・アンド・パーマでしょうか。キース・エマーソンが電子オルガンのキーボードにナイフは突き刺すわ、オルガンの上に乗って揺るわで、とんでもないパフォーマンスでした。当時、プレグレッシブ・ロックなんてジャンルの分け方をされていませんでした。その頃はブルース系のロックばかり聴いていたので、あまり曲は分からなかったですが、それでも映像はばっちり記憶に残っています。

覚えているのはこんなところかなと思います。リストを見るともっとたくさんバンドの名前が並びますが、残念ながらその頃知らないバンドは見えていなかったかも知れません。

サイモンとガーファンクルもこの番組で見た記憶があるのですが、でもウィキペディアのリストには載っていません。これがまたすごくいい映像だったのですよ。オープニングに「アメリカ」という曲が使われていました。飛行機で着いて、そのまま空港から市街へ車が移動していく中、風景をずっと追うのですが、モノクロの映像が歌によくマッチしていて、今でも彼等の曲の中では一番

好きですね。でもこの映像のソースはどこなのか、よく分かりません。

このヤング・ミュージック・ショーは、残念ながら NHK のアーカイブにも無いみたいですね。ストーンズのハイドパークコンサートは DVD でも出ているので持っているのですが、CCR やサイモンとガーファンクルの映像は、今でも見たいし、欲しいです。

昔はどうしても見られなかった映像が、今は YouTube など、ネットから閲覧できるので、いい時代かなと思います。ビデオもない時代に、番組にかぶりついていたあの頃は、もう完全に過去のものですね。

## カボチャの不思議



カボチャを育てるのは初めてではありません。前に植えたときには、たくさん雌花をつけて、そしてたくさん実をつけてくれました。カボチャは放っていてもどんどんツルを伸ばしていくので、割と育てやすい野菜です。

でも今回植えたカボチャはちょっと違うのです。現在、写真のような大きな実ができています。しばらく雄花ばかりで雌花ができなかったのですが、6月中旬頃からずいぶんと温かくなって、ぼちぼち雌花も登場してきました。最初の1個が結実して、

今こうなっているわけです。ところで、雌花は1個ではありませんので、自分で受粉できたものやこちらが人工授粉させたものあるのですが、ところが、写真の実以外は全部結実した後で、腐ってしまうのです。さも、最初の1個だけで、あとは意図的に実を結ばないような感じです。

これはあくまでも推察ですが、もしかして遺伝子操作により、こういう作物に作り替えられたのかと考えてしまいます。たくさん実をつけると、個々の実の大きさが十分に成長しない場合もあるのかも知れません。それに雌花をつむ農家の作業を考えると、独りで落としてくれた方が生産者にとっては作業が省けて楽ですね。

いずれ、もう少し様子を見守りたいと思います。